

2011年度 財団法人交流協会フェロシップ事業 成果報告書

## 特殊拍的教授法與台湾中高級日語學習者學習成效之檢驗

東海大学

林嘉惠

招聘期間 (2011年6月30日～8月28日)

2012年3月

財団法人 交流協会

# 特殊拍的教授法與台灣中高級日語學習者學習成效之檢驗

林嘉惠

東海大學日本語言文化學系 副教授

## 摘要

本稿首先回顧各種有關特殊拍教育的先行文獻，再介紹筆者近年來所施行的特殊拍教授法之實際範例。其次，藉由將以此教法學習的學生升上中高級之後的語音資料，讓語音學專家經由同音認定評定是否為適當發音，來掌握其學習的狀況，並探討此教授法之適切性，期能尋得改善方法。

關鍵詞：特殊拍、教授法、日語語音教育、台灣中高級日語學習者、語音學專家的同音認定

The Teaching Method of Special Mora and its Effect on  
Taiwanese Japanese Language Intermediate/Advanced Students

LIN, Chia-Hui

Associate Professor

Tunghai University Department of Japanese Language and Culture

Abstract

On the basis of previous research until now, I introduced the teaching method of special mora by some examples that I have been using. I used some intermediate/advanced students' vocal data to examine by a phonetician who is a Japanese native speaker to determine if their pronunciation was appropriate or not. These students were taught by me using this method when they were at the primary level, so I was able to decide whether or not the teaching method was appropriate based on the phonetician's judgment. Finally, I hope to discover a better way to teach special mora.

Keywords: special mora, teaching method, Taiwanese Japanese language  
intermediate/advanced students, Japanese phonetic education,  
examination by phonetician

# 特殊拍の指導法及び台湾人中・上級学習者における その学習効果の検証

林嘉恵

東海大学日本語文化学系 副教授

## 要旨

本研究は筆者が施してきた特殊拍の初級音声指導の適切さを探求することと、将来的によりよい教材を開発する可能性を探ることを目的とする。そのためにまず、今までの先行研究を踏まえ、筆者が行なってきた特殊拍の指導法を実例で紹介する。次に、この指導法を受けた学習者が中・上級になった際の音声データを用い、音声学によるネイティブ同定により、その習得状況を把握した上で、上記の指導方法の適切さについて考えたい。そして、その改善法について探りたいと思う。

キーワード：特殊拍、指導法、台湾人中・上級日本語学習者、  
日本語音声教育、音声学による同定測定

# 特殊拍の指導法及び台湾人中・上級学習者における その学習効果の検証

林嘉恵

東海大学日本語文化学系 副教授

## 1. はじめに

筆者は高等教育で十数年間日本語音声教育に携わってきた。その間、台湾人が苦手とする音声の研究やその指導法を試みてきた。しかし、学習者が初級の時に習ったものが、中・上級になっても、当初指導された通りに発音されているかどうか、また今までどおりの指導方法は果たして適切なのかという反省を入れた研究はまだ見ない。

戸田（2008）は「母語を問わず、多くの学習者が共通して指摘する問題点」で「特に目立つのは、特殊拍（促音・長音・撥音）に関する問題である」<sup>1</sup>としている。本研究もその目立つ問題点である特殊拍にしぼって論じたいと思う。

本研究の目的は、中・上級学習者における特殊拍の習得度を見ることにより、それらの学習者の初級音声指導の適切さを探求することと、将来的によりよい教材を開発する可能性を探ることにある。そのためにまず、今までの先行研究を踏まえ、筆者が行なってきた特殊拍の指導法を実例で紹介する。次に、この指導法で教わった学習者が中・上級になった際の音声データを用い、音声学によるネイティブ同定により、その習得状況を把握した上で、上記の指導方法の適切さについて考えたい。そして、将来的にその改善法を探りたいと思う。

具体的には、筆者がこれまでの3年間で集めてきた台湾人中・上級学習者の音声データの資料を、聴覚音声学的観点から分析し、特

---

<sup>1</sup> 戸田（2008）P31を参照。

に台湾人日本語学習者の特殊拍の発音傾向を調べてみた。音声データは、ある文章<sup>2</sup>の各段落を中・上級学習者が3人ずつ音読したものを研究対象とした。対象語が数多くあったため、今回はもっとも特殊拍の現れるバリエーションに富む部分<sup>3</sup>を分析対象とし、音声学によるネイティブ同定を行ない、聴覚的立場からの立証を求めることを目標としたが、その際、音響分析し、音響特性について計測、観察することも行なっているが、紙幅のため今回は割愛し、別紙にその観察や結果を報告することにする。

## 2. 先行研究

今までの特殊拍に関する論文は音素の異音の問題点や各言語話者の特徴<sup>4</sup>、日本語音声のモーラ構造<sup>5</sup>、長短音節の区別<sup>6</sup>など特殊拍の単音の研究に重点をおいたものが多かった。指導法についての研究も今田（1981）、戸田・黄（1989）、村崎（1990）はリズムや拍感覚についてはまったく触れておらず、特殊拍の発音方法に重点をおいたものが多かった。

棚橋・久保田（1992）による指導法では「一つ一つの音を同じ時間的長さで発音させます。このとき、手拍子を打ちながら・・・テーブルをドラムのようにたたくように拍感覚のみを言及している。

加瀬（2001）は「オバサン」と「オーバーサン」を例にとって、これまでは「母音の長短のミニマルペアを用いて、拍単位で区切って、手をたたいたりして発音させていました。しかし、拍感覚の指導だけではなかなか効果が上がりません。そこで/オ/・/バー/・/サン/のように、音節の長短で手のたたき方を変えたり/オバ/・/サン/のように2拍ごとにまとめ、より大きな単位で教えること」を紹介している。

土岐・村田（1989）の中の練習は文レベルから入っており、「より

<sup>2</sup> 鹿島（2002）のはしがきを参照。

<sup>3</sup> 実験モデル文の内容は付録1を参照。

<sup>4</sup> 村木・中岡（1990）、猪塚・猪塚（2003）、榎本（2006）などを参照。

<sup>5</sup> 天沼・大坪・水谷（1978）粕谷・佐藤（1990）、酒井（1992）などを参照。

<sup>6</sup> 川上（1963）などを参照。

大きな単位」を日本語教育に応用した例なので、学習者自習用には適しているが、教室の指導例ではない。

田中・窪園（1999）は「日本語話者は拍を二つずつにまとめてリズムを安定させる傾向が強くあり」、「日本語にとって2拍というまとまりが非常に整ったリズムの単位」で「この2拍のまとまりのことを特にフット（foot）と言う」とするが、鹿島（2002）ではリズムを構成する単位をリズムユニットという名前を提案している。ここでは、「リズムユニット1」とは「1モーラ分の音節量をもつ単位（C）V」で、「リズムユニット2」とは「2モーラ分の音節量をもつ単位（C）VCV、（C）VM」であり、あらゆる語はこの2種類のリズムユニットの組み合わせとして規定できることになるとしている。またこのリズムユニットの組み合わせを9つのリズム型に分類した<sup>7</sup>。この分類の仕方は日本語教師の参考になることに間違いはないのだが、初級段階からいきなり9つのリズム型とは負担が大きすぎるように思われる。

筒井・喜多（2011）では、「日本語のリズム」という章立てで「リズムは2拍子」で「日本語らしい発音」を提唱している。ただ指導法というより、「歌を歌ってみよう」、「応援のリズム」、「数を数えるリズム」、「俳句のリズム」のように練習例の紹介にとどめたのみである<sup>8</sup>。

林（1991）はリズム教育の留意点については紙幅を多くとり言及したものの、その指導を「どう行えばよいかは今後の課題にしたい」<sup>9</sup>と締めくくっている。

そこで、筆者は以上の先行文献で見てきたもののポイントを自分なりの理解や経験でアレンジして、数年前から初級者を対象に以下の3.のような指導法を行っている。

### 3. 筆者によるリズム感覚を含んだ特殊拍の指導法

<sup>7</sup> 詳しくは鹿島（2002）P95-99を参照。

<sup>8</sup> 詳しくは筒井・喜多（2011）P86-91を参照。

<sup>9</sup> 林（1991）P143を参照。

### 3.1 長音の単音の指導法

長音の発音方法は前にある母音を一拍分のばし、パターンは母音と同じ5種類ある。

#### 板書

お	ば	さ	ん	:	お	ば	あ	さ	ん
お	じ	さ	ん	:	お	じ	い	さ	ん
	ゆ	き		:	ゆ	う	き		
		え		:	え	え			
	と	る		:	と	お	る		

ただし、上に挙げた「ええ」([e:i])と「おお」([o:])は主に訓読みに使い、仮名表記としてむしろ少ないほうである。それに代わって下のように一般的に音読みされる漢字語(「えい」や「おう」の形で現れる)の長音のほうが多く使用されていることも触れておく。

#### 板書

へ	や	:	へ	い	や	
こ	こ	:	こ	う	こ	う

ここで筆者が使っている説明は「日本語の長音には2つの変音規則がある」である。一つ目は「e段+い→ee」:え段の後ろに「い」という仮名が来たら、長音の「ええ」とよむ(當え段音遇到い這個假名・會變成長音的發音ええ)。二つ目は「o段+う→oo」:お段の後ろに「う」という仮名が来たら、長音の「おお」とよむ(當お段音遇到う這個假名・會變成長音的發音おお)。また、その音声の歴史的な変遷についても触れておく。

一通り導入ができれば、今度は黒板に書いてあるその文字の下線部分を発音しながら、手で当ててたたいてみせると同時に手拍子を聞かせる。アクセントの違いも大きなポイントを担っていることについても説明する<sup>10</sup>。

発音方法の導入をしたら、次は聴覚的練習に入る。教師が発音し

<sup>10</sup> たとえば、「長音は高低、低高のケースが多いので、中国語の声調の二声(低高)や四声(高低)に聞こえることが多い」などの説明。



たのは黒板の右側のことばか左側のことばか、だいたいの区別ができるようになるまで右手か左手かを挙げてもらう。

ちなみに、二重母音が出てきたら、拍感覚の重要性を強調してから、長音同様に発音は孤立語の中国語のように一文字一文字区切って発音するのではなく、切らないで一気に発音したほうが自然に聞こえることも強調する。

### 3.2 撥音の単音の指導法

撥音というのは「口の形が次に来る子音に合わせる準備をする鼻音（嘴形準備發下一拍的鼻音）」のことで、長音同様一拍の長さを持っているということを学生に伝える。

#### 板書

こ ん に ち は [n] (後ろに来る子音が歯茎につくもの)  
こ ん ば ん は [m] (後ろに来る子音が両唇音であるもの)  
て ん き [ŋ] (後ろに来る子音が軟口蓋音であるもの)  
き ん え ん [v] (後ろに来るのが母音<sup>11</sup>であるもの)  
こ ん ば ん は  
き ん え ん [v] / [N] (後ろに来るのが母音であるもの)

ここでのポイントは鼻母音 [v] の練習と口蓋垂鼻音 [N] の聴覚上の聞き分けである。鼻母音の出し方は台湾語の鼻母音の例、たとえば、餛 (あん) [ã]、嬰嬰睏 (ぐっすり寝る) [i]、紅嬰兒 (赤ん坊) [ê] などを出すと、理解されやすいだろう。

口蓋垂鼻音 [N] は中国語の「ム」[ŋ] の発音をうんとのどを下げて言うのがコツだと伝えて、発音して聞かせる。

### 3.3 促音の単音の指導法

促音は1拍つまって口の形は次に来る子音の発音に合わせる準備をするように発音すればクリアできることをまず伝える。発音方法は台湾語の入声と同じコツであるが、台湾語の入声の場合は<sup>アクセント</sup>声調(高低)であるのに対し、促音は前の拍と合わせてひとまとまり(1

<sup>11</sup> 後ろにくるのがサ行であるものもここに入れるべきなのだが、初級時の指導法はこのことをあえて教えない。

音節) で発音されるが、音量は2拍という数えである。台湾人学習者が促音を出す場合、よく入声に転訛しやすく、音量的に短い現象が見られるため、促音のところを1拍分しっかりつまるように発音することを強調する。

#### 板書

お と : お っ と (後ろがタ行のとき [t] になる)  
 こ ぶ : こ っ ぶ (後ろがバ行のとき [p] になる)  
 ぶ か : ぶ っ か (後ろがカ行のとき [k] になる)  
 い さ い : い っ さ い (後ろがシ以外のサ行のとき [s])  
 い し : い っ し (後ろがシのとき [ɕ] になる)

長音と同様、発音方法がだいたいわかったら、聴覚練習で右か左か手を上げさせて、区別ができるか確認する。

#### 3.4 リズムの指導法

2. の先行研究で見てきたポイントと同じように、筆者が特殊拍を指導する際もリズム感覚の習得をもっとも大事な目標とし、コースの初期からその重要性を強調している。

3.1~3.3 の特殊拍の発音を導入するのと同時に、リズムを取るために発音に合わせて、手を等間隔にたたかせる。課ごとの新出単語を導入する際に、いつも学習者全員に先に手をたたいて発音させてみる。新出語彙に会うたびにそうするよう習慣付けないと、すぐ母語の癖が出てしまうからである。例えば、

- ① 行ったあとき
- ② かんじい (漢字) は…
- ③ もんくう (文句) を…
- ④ 食べてえください
- ⑤ えいごお (英語) のお勉強

などが主な誤りである。このほか、教師が学習者にとっての未習語を言って聞かせてから、そのことばの拍数を数字で書かせるような小テストも随時行なっており、このため学習者はリズムに気をつけるようになる。

また、学習者が家にいるときもリズムの練習ができるように手をたたきながらの単語の発音をテープに収録させ、発音矯正の材料にしている。学習が進むにつれ、発音が早くできるように設定したため、

① 1拍に1回手をたたくバージョン（モーラ単位）

例) あ た た か か っ た で す。(下線は手拍子を表す)

② 2拍に1回手をたたくバージョン（フット単位）

例) あ た た か か っ た で す。(下線は手拍子を表す)

③ 手をたたかないで同じリズムで速度を速めるバージョン。

例) あたたかかったです。(普通の発話スピード)

のように練習を3種類にしている。初めの頃は①だけ練習し、2、3回発音矯正をしてから①と③のバージョンを収録させるようになり、さらに上手になったころに、②で手拍子が取れることばも入れて①と②と③の3通りのバージョンを収録させて、発音練習をする、というふうに増やしていく。

北京語も台湾語も音の長短に意味の違いが生じないため、学習者にとって特殊拍の習得が難しいことは言うまでもない。日本語のリズムを身につけさせるためには継続的な指導が必要となる。

指導法に関するアドバイスとして、土岐（1990）は「言語形成期を過ぎた人間が、何か新しい発音法を身に付けようとした場合、よほど音声学的素養に恵まれていなければ独習はかなり困難である」とし、「一 それまで自分が獲得している近似音との違いを適確に聴き分け、二 目標とする音声を真似てみた結果がどうであるかを判定・評価し、三 目標とする音声を構成するいくつかの側面を考慮しながら修正を加え、四 完成したら、何度発音しても失敗しないように慎重にくり返し定着をはかる……などの作業が必要であり、いずれの段階でも適切な判断、評価が求められるからである。」<sup>12</sup>と唱えている。上記の指導法も彼のアドバイス通りの段取りをふまえて

<sup>12</sup> 土岐（1992）P121を参照。

ていると言えよう。

今回の調査対象になる中・上級学習者が初級の際にも以上のような方法で特殊拍（リズムを含む）の指導を受けていた。

#### 4. 調査方法

##### 4.1 台湾人中・上級学習者による音声データ

筆者が開講している「日本語音声学概論」という授業を履修していた日本語を専攻とする大学4年の学生に、付録1の文章を音読させ、SMRP(Super Mp3 Recorder Professional)というソフトを使って録音した。「中・上級とは初級を終了してから日本人と同等のレベルに到達するまでの段階を指す。…(中略)一般的には、語彙数6000程度、漢字数1000程度を提示するまでの段階が中級、それ以上が上級」<sup>13</sup>であり、筆者が勤めている大学では一年で初級のコースを終わらせているため、本研究が用いた学部4年生による音声データは中・上級学習者によるものとみなした。また、前述したように、対象語が数多くあったため、今回は割愛した音声データも多く、もっとも特殊拍の現れるバリエーションに富む部分だけを分析対象とした。この部分を音読したのは3人にとどまったため、音声データはこの3人のものを使用した。これらの音声データは男性1人(TM5)、女性2人(TF3、TF4)によるものであり、全員20代前半で、録音時は大学4年の後半に在籍していた。

##### 4.2 日本人ネイティブ・スピーカーによる音声データ

上記の台湾人中・上級学習者が音読した文章を日本語話者男性1人(20代、東京都出身)、女性1人(30代、千葉県出身)にも読ませた。それぞれ、JM1, JF2の記号で示す。

被験者2人には全体の文章を普通の速さで読むように指示した。録音はリニアPCMレコーダPCM-D1 1号機を使い、東京外国語大学音声学研究室録音室内でWAV形式の録音を行なった。

##### 4.3 調査語の選択

---

<sup>13</sup> 森田(1990) P64を参照。

付録 1 の下線部のように、特殊拍が含まれている語を調査語とした。以下の 38 語である。

長音 (13 語) ①場合には②難しいな③十分に④音声学に

⑤達成されて⑥印象は⑦このような⑧目標が⑨そのような

⑩参考⑪目を通して⑫これ以上の⑬書くように

撥音 (19 語) ①大変で②こんなにも③責任の④十分に⑤文献に

⑥本に⑦参考⑧文献に⑨疑問が⑩考えを⑪この本が

⑫認識⑬印象は⑭本書で⑮出版されて⑯音声学に

⑰関する⑱本は⑲この本を

促音 (6 語) ①出版されて②第一歩として③深めていって

④あってから⑤一冊の⑥達成されて

#### 4.4 ネイティブによる同定測定の結果及びその考察

今回のネイティブによる同定測定は東京外国語大学音声研究室の音声学者に依頼した。その際、違和感を感じた学習者の発音も IPA 記号で併せて記してもらった。以下の表 1～表 3 にある○は違和感がない、×は持続時間に違和感がある、△はリズムに問題はないが、少し音色に違和感があることを示している。△の後ろにあるのはその音色についての説明で、S (short) は目標音より短い、L(long) は目標音より長い、B(balance)はバランスが崩れているという意味である。また、→は左側の目標音の直前の子音が右側のように発音されている、[ ]の中は違和感がある音の IPA 記号であるという意味である。

##### 4.4.1 長音

##### 4.4.1.1 長音の同定測定の結果

表 1 長音 (13 語)

音声内容	JM1	JF2	TF3	TF4	TM5
/aR/[a:] ①場合には [ba:iɲiɯa]	○	○	× (S)	○	○
/iR/[i:] ②難しいな [muɯzukaç <u>i</u> na]	○	○	○	○	○

/uR/[u:]	③十分に	○	○	○	○	○
	[dʒu:bʊŋni]					
/eR/[e:]	④音声学に	○	○	× (B)	○	○
	[oɪse:yakuŋni]					
	⑤達成されて	○	○	× (S)	× (S)	○
	[tasse:sarete]					
/oR/[o:]	⑥印象は	○	○	○	○	× (S)
	[iɪço:ɯŋa]					
	⑦このような	○	○	○	○	Δy→L
	[konojo:na]					[oɻ]
	⑧目標が	○	○	○	○	○
	[mokuço:ya]					
	⑨そのような	○	○	× (S)	Δy→L	Δ[oɻ]
	[sonojo:na]					[oɻ]
	⑩参考	○	○	○	○	○
	[saŋko:]					
	⑪目を通して	○	○	○	○	○
	[meoto:çite]					
	⑫これ以上の	○	○	× (L)	○	× (S)
	[koreizo:no]					
	⑬書くように	○	○	Δ	Δ[oɻ]	○
	[kakujo:ni]			y→L		

上にある長音の結果を以下のようにまとめてみた。

1. /aR/[a:] 「①場合には (バーイニハ)」は学習者 TF3 のみが「バイニハ」と[a]が短く発音している。
2. /iR/[i:]と/uR/[u:]は②と③の一例ずつであるが、全員うまく読めているといえる。
3. /eR/[e:]のところは2箇所持続時間が不安定の誤用があった。
  - ① TF3 の「④音声学に (オ・ン・セ・ニ・ガ・ク・ニ)」の発音はどうしても「オン・セエ・ガ・ク・ニ」のように、まるで

中国語の音節のように5モーラに聞こえてしまう。

- ② 「⑤達成されて(タッセーサレテ)」のところではTF3もTF4も「タッセサレテ」のように/eR/[e:]が短くなっていることが窺える。
4. /oR/[o:]は8語も入っているためか、3人の学習者の発音に違和感のあるところが少なくない。
- ① 全員正しく言えたのは「⑧目標が」、「⑩参考」、「⑪目を通して」の3語のみである。
  - ② 「⑥印象は(インショウハ)」ではほかのところではうまくできている学習者TM5が「インショハ」と短くなっている。
  - ③ 「⑦このような(コノヨウナ)」では、学習者TM5が目標音の直前の子音、つまり「ヨウ」の子音の/y/を少し長めに発音する嫌いがあり、そして、長音/oR/[o:]を[oɥ]に音変化させてしまう傾向がある。
  - ④ 「⑨そのような(ソノヨウナ)」では、学習者TF4が目標音の直前の子音、つまり「ヨウ」の子音/y/を少し長めに発音する嫌いがあり、そして、学習者TM5と同様、長音/oR/[o:]を[oɥ]に音変化させてしまう傾向がある。
  - ⑤ 「⑫これ以上の(コレジョウノ)」では、学習者TF3は長音/oR/[o:]をさらに長くのばし、「コレジョーウ」のようになり、逆に学習者TM5では「コレジョ」のように短くなっている。
  - ⑥ 「⑬書くように(カクヨウニ)」では、学習者TF3が目標音の直前の子音、つまり「ヨウ」の子音/y/を少し長めに発音する嫌いがあり、そして、学習者TF4は長音/oR/[o:]を非円唇前舌半狭母音[oɥ]に音変化させてしまう傾向がある。

#### 4.4.1.2 長音の同定結果による考察

以上の結果を考察し、次の3点が導き出された。

- ① 長音は持続時間に許容できないものが39例(100%)の中8例(21%)あった。サンプル数が多いためもあるが、台湾人には難しいということは間違いないのである。
- ② 長音が母音連続の前後にあると、許容できないものが多くなっているように思われる。
- ③ 3人の被験者のうち、2人が「ヨウ」の子音/y/を長めに発音することがある。このほか、同じく3人の中に2人が長音の[o:](円唇前舌半狭母音)を非円唇前舌半狭母音[oɤ]に発音する傾向がある。

#### 4.4.2 撥音

##### 4.4.2.1 撥音の同定測定の結果

表2 撥音(19語)

音声内容	JM1	JF2	TF3	TF4	TM5
/Nd/[nd] ①大変で [taihende]	○	○	○	○	○
/Nn/[nn] ②こんなにも [konnanimō]	○	○	○	○	×
③責任の [sekʲiɲinno]	○	○	×(S)	○	×
/Nn/[ɲɲ] ④十分に	○	○	×(S)	○	○



		[dzɯ:bɯŋɲi]							
	⑤ 文献に		○	○	○	○	○		
		[bɯŋkɛŋɲi]							
	⑥ 本に		○	○	○	○	○	×	
		[hoŋɲi]							[o] → (L)
									[ɲ] → (S)
/Nk/[ŋk]	⑦ 参考		○	○	○	○	○		
		[saŋko:]							
	⑧ 文献に		○	○	○	○	○		
		[bɯŋkɛŋɲi]							
/Ng/[ŋŋ]	⑨ 疑問が		○	○	○	○	○		
/ [ŋg]		[gimɔŋŋa]							
	⑩ 考えを		○	○	×	(S)	○		
		[kaŋŋaeo]							
	⑪ この本が		○	○	○	○	○		
		[konohɔŋŋa]							
/Ns/[ɲc]	⑫ 認識		○	○	○	○	○		
		[ɲiɲciki]							
	⑬ 印象は		○	○	○	○	○		
		[iɲco:ɯŋa]							
	⑭ 本書で		○	○	○	○ <sup>14</sup>	○		
		[hoɲcode]							
/Ns/[ɲs]	⑮ 出版されて		○	○	○	○	○		
		[ɲɯppaiɲsaret							
		e]							
	⑯ 音声学に		○	○	×	(B)	○		
		[oɲse:yakuɲi]							

<sup>14</sup> 今回の調査は TF3 だけが「⑭ 本書で (ホンショデ)」を「ホンショード」のように伸ばしてはいけないはずのところを伸ばしてしまうため、短音の長音化という問題になるが、また別の機会で述べることにする。

	⑰ 関する	○	○	○	○	○
	[kaɪsɯrɯ]					
/NV/	⑱ 本は	○	○	○	○	○
[uɪɯ]/	[houɪɯa]					
[uɔ]	⑲ この本を	○	○	△[ɸo]	△[ɸo]	△[ɸo]
	[konohouɔ]					

上にある撥音の結果を以下のようにまとめてみた。

1. /Nd/ [nd] のところは「①大麥で」しかなく、全員正しく発音している。
2. /Nn/ [nn] は2語あるのだが、「②こんなにも（コンナニモ）」はTF3とTF4は正しく読めているのに対し、TM5は前母音[o]を長く伸ばし、[n]を短く発音しているため、「コニナニモ」のような音になる。  
また、「③責任の（セ・キ・ニ・ン・ノ）」のところでは、TF3もTM5も[n]が短く、「セ・キ・ニン・ノ」のように聞こえてしまう。
3. /Nn/[ɲn]は全部で3語ある。
  - ① 全員よく読めているのは「⑤文献に」のみである。
  - ② 「④十分に（ジュ・ウ・ブ・ン・ニ）」では、TF3が「ジュ・ウ・ブン・ニ」のように短く発音している。
  - ③ 「⑥本に（ホ・ン・ニ）」では、TM5は前母音[o]を長く伸ばし、[n]を短く発音しているため、「ホン・ニ」のような音になる。
4. /Nk/ [ɲk]全員が間違えずにうまく読めている。
5. /Ng/[ŋŋ]（[ŋg]と発音している人もいる）は割合うまく習得しているようであるが、それでも、TF3の「⑩考えを（カ・ン・ガ・エ・ヲ）」は「カン・ガ・エ・ヲ」のように[ŋ]が短くなっている。
6. /Ns/ [ɸɕ]のところは「⑫認識」、「⑬印象は」、「⑭本書で」の3語ともに撥音の持続時間に問題はない。

7. /Ns/ [fɪs]の音声が見れている「⑮出版されて」、「⑰関する」も割合問題なく発音されているが、「⑯音声学に」は長音の⑤と同一データであるため、同じようにTF3の「④音声学に(オ・ン・セ・ニ・ガ・ク・ニ)」のリズムバランスが「オン・セエ・ガ・ク・ニ」と崩れている。
8. /NV/[uɪu]「⑱本は」は全員うまくこなしているが、/NV/[uɪo]「⑲この本を(コノホンヲ)」は持続時間に問題はないが、学習者3人とも[uɪo]の音色が[ɸo]になっている。

#### 4.4.2.2 撥音の同定結果による考察

以上の結果を考察すると、以下のようなものが言えよう。

- ① 撥音/N/の後ろにくる/d/, /k/, /g/, /s/, つまり、/Nd/, /Nk/, /Ng/, /Ns/はたまに失敗するケースもあったが、ほとんどうまくこなしており、これらの音は撥音の中では割合習得しやすい音の組み合わせと言えよう。
- ② 撥音の後ろに来る/n/, つまり/Nn/は異音の[n] (6例(100%)中3例(50%))も[ɲ] (9例(100%)中2例(22%))もほかの語に比べ、より間違えやすいようである。
- ③ 後ろに母音がある撥音[ɲ]は全員正しく発音できるのだが、[uɪ]がくると、リズムに問題はないが、全員が違った音質である鼻音化した有声口蓋垂摩擦音[ɸ]になっている。このことは撥音の異音である鼻母音[uɪ]の習得が台湾人学習者にとって難しいということを示唆していると言えよう。

#### 4.4.3 促音

##### 4.4.3.1 促音の同定測定の結果

表3 促音(6語)

音声内容	JM1	JF2	TF3	TF4	TM5
/Qp/[pp] ①出版されて [ɕɯppaɪsarete]	○	○	○	○	○

	② 第一歩として	○	○	/ <sup>15</sup>	○	○
	[daiippotoçite]					
/Qt/[tt]	③ 深めていって	○	○	○	○	○
	[çukameteitte]					
	④ あってから	○	○	○	/ <sup>16</sup>	○
	[attekara]					
/Qs/[ss]	⑤ 一冊の	○	○	× (S)	○	○
	[issatsu <del>no</del> ]					
	⑥ 達成されて	○	○	○	○	○
	[tasse:sarete]					

#### 4.4.3.2 促音の同定結果による考察

上の表を見ればわかるように、促音は TF3 の「② 第一歩として」と TF4 の「④ あってから」の読み間違いを除けば、「一冊 ([ss]) の」の一箇所だけ長さが短いものがあつた。しかし、もうひとつの [ss] (達成されて) は許容範囲であつた。それ以外の両唇破裂音と歯茎破裂音も許容されるものであつた。促音のサンプル数は長音、撥音に比べ、少なかったのだが、読み間違いの 2 例を除けば、促音に関しては 16 例 (100%) 中 15 例 (94%) が許容範囲であつたため、習得度が高いと言えよう。

#### 5. 終わりに

この論文では筆者が行なってきた指導法の紹介をし、その適切さを見るために、学習者の音声データをネイティブスピーカーの音声学者による同定測定をして、その習得状況を測ろうとしたが、今回の研究はあくまでも手元にあつた資料をパイロット研究的なアプローチとして試してみたもので、行き届いたものとは言えない。それでも、全体的に見ると筆者による特殊拍の指導法は不完全ではあるが、持続時間に関しては、×のもののパーセンテージが高くないた

<sup>15</sup> TF3 は「第一歩」を「ダイイチボ」に読み間違えたため、促音が欠落したため、研究対象語から除外した。

<sup>16</sup> TF4 は「あってから」を「あつたから」に読み間違え、促音は入っているものの、後ろの拍の母音が違うため、研究対象語から除外した。

め、習得度は決して低くないと思われる。

また、本論文によって、新たに発見したことや問題点は、

- ① リズム感覚は中・上級になっても、意識的に持続的な練習を続けなければ、完全に習得することは難しいようである。
- ② 筆者の指導法を受けた学生にとって、長音の持続時間の習得は撥音と促音に比べて難しいようである。
- ③ 長音の場合、母音連続の前後にあると、より難しくなるように思われる。
- ④ 台湾人は「ヨウ」の子音/y/を長めに発音することがあり、また「ヨウ」の長音の代わりに非円唇前舌半狭母音[o<sub>ɤ</sub>]を用いて発音する傾向がある。
- ⑤ 後ろに/n/（[n]/[ɲ]）がくる撥音の持続時間はほかの撥音の異音に比べ、より間違えやすいようである。
- ⑥ 後ろに母音がくる撥音 [i] は、全員が違った音質である鼻音化した有声口蓋垂摩擦音 [ɣ] になっている。このことは撥音の異音である鼻母音 [m̃] の習得が台湾人学習者にとって難しいことを示唆していると言えよう。
- ⑦ 筆者の指導法を受けた学生にとって、促音の習得度がいちばん高いと言えよう。

最後になったが、今回発表できなかった音響分析の結果と、本研究で新たに発見した結果をふまえて、本格的な調査分析を行なえば、興味深い結果が期待できよう。そして、その結果を見てから、筆者の指導法をどう微調整すればよいかが見えてくるものだと思う。今後も研究を続けていく必要性を強く感じている。

謝辞

この度、財団法人日本交流協会に研究助成金をいただき、2011年6月末から2ヶ月間、東京外国語大学音声学研究室にて中・上級台湾人日本語学習者が音読した特殊拍の分析を行った。東京外国語大学音声学研究室に滞在していた期間には益子幸江教授よりいろいろご助言を受けただけでなく、専門家としての音声同定を快く行なってくださった。また、多くの日本の研究者に大変お世話になり、心より感謝の意を表したい。最後にこの機会を与えてくださった交流協会にもお礼を申し上げる。

#### 参考文献

- 天沼寧・大坪一夫・水谷修（1978）『日本語音声学』くろしお出版 P79-82
- 猪塚恵美子・猪塚元（2003）『日本語の音声入門』バベル・プレス P97-106
- 今田滋子（1981）『教師用日本語教育ハンドブック6発音』国際交流基金 P66-80
- 榎本正嗣（2006）『現代日本語発音の基礎知識』学文社 P27-29、54-58
- 加瀬次男（2001）『日本語教育のための音声表現』学文社 P74-79
- 鹿島央（2002）『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク P88-99
- 粕谷英樹・佐藤滋（1990）「長音・二連母音と二重母音ー日本語話者と英語話者の場合ー」『講座日本語と日本語教育3日本語の音声・音韻（下）』明治書院 P178-197
- 川上葵（1977）『日本語音声概説』 P59-103
- 酒井裕（1992）『音声アクセントクリニック』凡人社 P10-12
- 田中真一・窪園晴夫（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版 P39-54
- 棚橋明美・久保田美子（1992）『日本語の教え方短期実践講座②日本語の発音と教え方』アルク P58-60
- 筒井由美子・喜多民子・大村礼子（2011）『やさしい日本語の発音トレーニング』ナツメ社 P49-63
- 土岐哲・村田水恵（1989）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ12発音・聴解』荒竹出版 P5-18
- 土岐哲（1992）「音声の指導」『講座日本語と日本語教育13日本語教育教授法（上）』明治書院 P111-138

- 戸田貴子 (2008) 「日本語学習者の音声に関する問題点」  
『日本語教育と音声』くろしお出版 P23-41
- 戸田昌幸・黄國彦 (1989) 『-為中国人設計的-日語語音學入門』鴻儒堂  
P113-131
- 益子幸江、桐谷滋 (1992) 「日本語学習者におけるモーラ音素の習得  
について」『日本語教育学会大会 1992 年度春季大会予稿集』  
P19-24
- 村崎恭子 (1990) 「発音指導の方法」『講座日本語と日本語教育 3 日  
本語の音声・音韻 (下)』明治書院 P86-90
- 村木正武・中岡典子 (1990) 「撥音と促音－英語・中国語話者の発音」  
『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 (下)』明治  
書院 P139-177
- 森田富美子 (1990) 「学習段階別教授法」日本語教育ハンドブック  
大修館書店 P56-66
- 林嘉惠 (2009) 「東海大學 (台湾) 日本語文學系における  
音声教育」『日本語教育をめぐる研究と実践』  
水谷信子監修 凡人社 P93-108
- 林文賢 (1991) 『日本語教育における音声教育研究－中国人学習者を  
対象に－』文笙書局 P111-14

#### 付録 1 (実験モデル文内容)

「音声学」に関する本は、これまでも内外を問わず出版されて  
いて、どの著書も優れていることは間違いないのですが、「難しいな  
あ」という印象は拭えません。このような中で、本書でめざした「と  
にかく易しく」という目標が、十分に達成されていることを祈るば  
かりですが、読み進めるうちにさらにいろいろな疑問が湧いてくる  
と思います。そのような場合には、参考文献にあげた書物にもぜひ  
目を通して、考えを深めていってください。この本が、そのための  
第一歩として何かのお役に立つならば著者としてこれ以上の喜びは  
ありません。この本を書くようにお話があってから、かなり長い月  
日が経ちました。一冊の本にまとめることが、こんなにも大変で責  
任の重いことか改めて認識しました。